

ずいそう

## 熊に出会った話

西山芳一



愛車のラジオからは日本シリーズが流れていたと思う。今でも横浜ベイスターズで「ハマのおじさん」として活躍している工藤公康投手が、西武ライオンズの新人一年目なのに大事な試合で投げている時のことだった。さほど野球には興味がなかったのが当時のことをインターネットで調べてみると、それは1982年10月10日、日本シリーズではなくパ・リーグのプレイングオフで日本ハムとの第二戦、江夏豊投手と投げ合って勝利を手にし、西武ライオンズを初のリーグ優勝に導いてゆく試合のようである。ラジオはその野球を放送している局以外は入らないような山道を走っていた。

撮影の目的地は田代山湿原で、明早朝の朝霧を狙うつもりだった。当時の私は今のように日本全国を駆けずり回って土木構造物ばかりを撮影するのではなく、大半がモデルや静物と向かい合うスタジオ撮影だった。そんな撮影が嫌ではなかったが、自称「自然派」である私は、数日でも余裕ができると、家庭も顧みずにスタジオからそのまま四輪駆動車を駆って林道へとまっしぐらであった。関東から東北にかけての県境の高地、尾瀬沼の周辺には田代と呼ばれる湿原が多数点在する。そんな谷戸など湿原の風景が当時の作品としての被写体だったが、本心を言えば撮影というよりも自然に癒されに行っていたようなものだった。

キャンピングカーでの中長期ロケでは、撮影以外に食料の買出し、入浴（温泉）、就寝場所の選定が、毎日の三大大事となる。常に二日分ほどの食料は積んでいるが、食料品店は事前の検索がしづらいので、行き当たりばったりということが多し。館岩村と呼ばれていたこの辺りでは国道を外れると全く商店は存在しない。今のうちに今夜の買出しをしなくては…。と思う間もなく「よろず屋」を発見。生活に必要な最低限の商品が雑多に並ぶ中、何故か生牡蠣が存在を主張していた。こんな山中では決して新鮮とは思えないが、今夜の肴は車中での温かい牡蠣鍋と決め、細く萎びた泥つきネギも一緒に購入した。

入浴は店から数km走った「湯の花温泉」、宿泊は温泉から林道を10kmほど登った登山道入口の駐車場と出発前から決めていた。まずは、ひなびた温泉に

入浴。湯船の中には同じようにひなびた地元老人の先客がいたので、早速、野球の話から導入して地域の情報収集を行った。林道通行の可否と獣、特に熊の出没状況が知りたかったが、双方とも問題はないようだ。彼は先ほど山から下りてきたばかりであるし、熊には十年ほど出くわしてないと言う。

とっぷりと日の暮れた林道を走っていると、あのオヤジに騙されたのか、ここ数時間のうちに落石があったのか、あと200mほどで目的地という所で、前方の林道を黒く大きな岩が遮っている。高さ1.5m、幅3mほどだろうか、いくら四輪駆動車でも乗り越えられる大きさの岩ではない。脇をすり抜けられぬものかと近寄ってライトをアップにした途端、その岩の右側が動き、二つのギラッと光るものが眼に入った。本州に生息する中では最大級のツキノワグマである。数秒の睨み合いののち、「おっと、すまないね。」といった感じで、重そうにノツノツと右の沢に降りて行った。

誰もいない駐車場で一人、熊の手が入らないほどに窓を少し開けて換気をし、牡蠣鍋を堪能する。こんな時はやはりヌル爛の日本酒に限る。暖かい車内の窓ガラスに着いた結露は何条か滑り落ち、漆黒の闇夜を線で現す。熊に出会った興奮状態は酒に酔って緩和されつつあるが、「窓の隙間から出てゆく香りを嗅ぎ逃すはずはない。」「10mほどの範囲に居て、こちらの食を羨んでいるに違いない。」そんな思いが徐々にもたげてくる。それと同時に、なぜか急に便意ももたげてきた。

ジープを改造した車内にはトイレはない。通常は外で済ませるのだが、奴は絶対にそばにいるはずだ。まして冬眠前である。確実に襲われる。だが、音と光には敏感で、すぐ逃げるらしい。そこでエンジンの回転を上げ、フォグランプも全て点灯し、しつこいほどに増設のエアホーンを何度も鳴らす。意を決して外に出、前方を照らすライトの光条の間に入り、一瞬雲の如くに用を済ました。人に見られていたら滑稽であろう。

やがて無事に夜は明けるが、霧中で何も見えないので撮影は断念した。ダムの施工現場に遭遇し、土木写真に目覚めることになるのは、その帰途のことだった。

——にしやま ほういち 土木写真家——